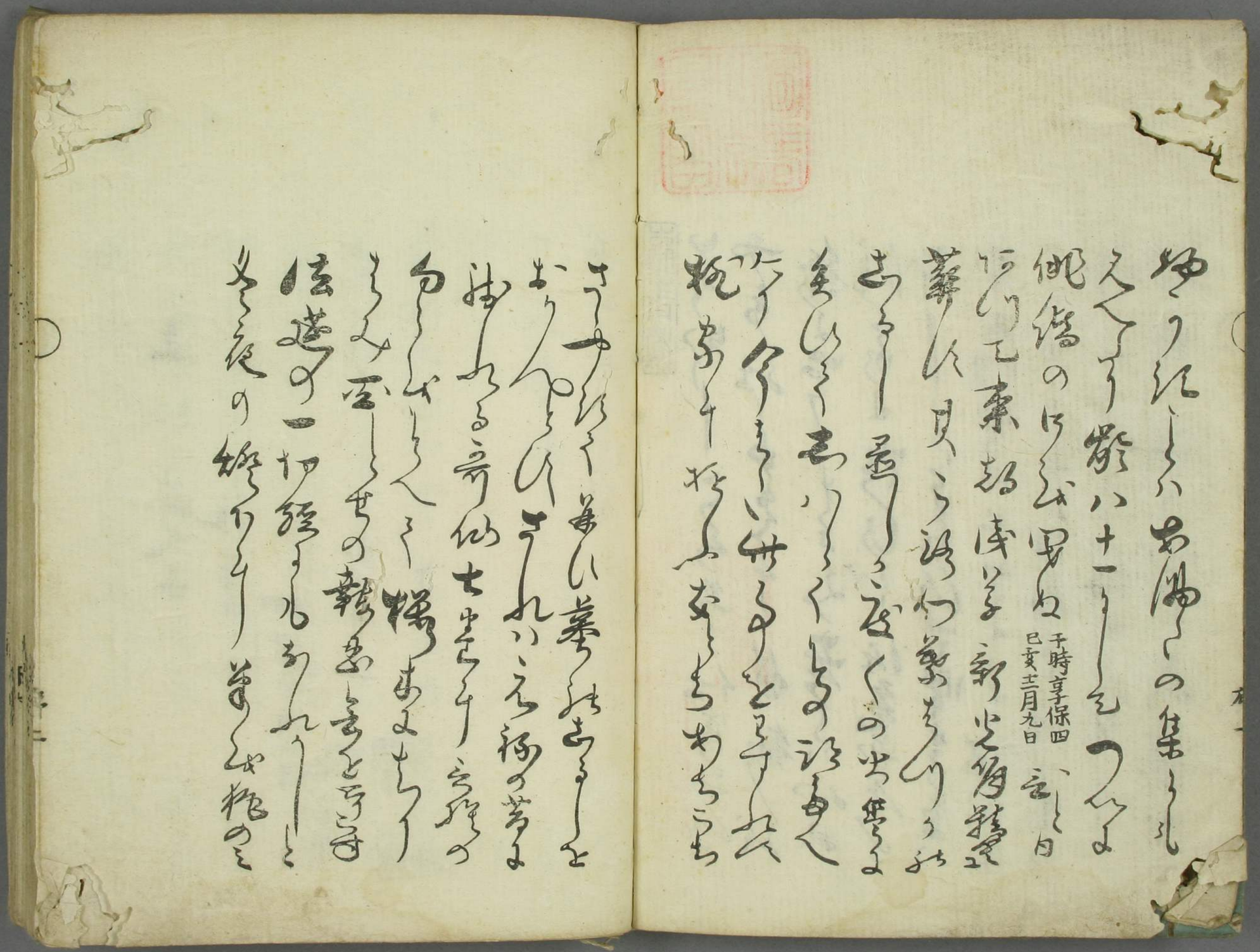
へ 5
1883

へ5

宇野文庫



于時享保四
己亥十二月九日

文化元年

四世市川團十郎

桃隣

元禄六丙子月十八日

人麿講　桃隣亭

元又東叡山ゟ義孝様
書ハ代々ゟもらきゝ
孫月赤貝赤の絲帆引
四五八ゟ三ゟ詞周ひ
両箱を物ゟ中ゟ上ゲた
船り代明ゟ大の異づ

枳風
仙化
全峰
氷花
其角
从我

風を大燒て淺く大和機　桃隣
燒の帰るに成る沐米　万卷
仲秋垣絶丁さに成り　角
山ふをとる小田原乃夜　風
まとる聲一日二日ものの思ひ　花
繋の結目のもるき姿見　化
繋を採まもよる武士めし　我
一里余り三番大井川　角
鮑の石の擬ひ　卷

ちんさま御師の神乗移し　花
度数遠を月の目明先と　我
結氣よ・ふをよもを虫の声　風
蘭を荷作もる都の絶を　化
名誉な癖くロて凡元九　隣
隠まるき看板書ハ九　我
彩や浸ると手まの姫　卷
石灰の烟りにむこき数るのも　隣
穀の中まて洗足洗足　化

縋ふれてるるかく訪ひる姿
蕎麦 急ぐ甘とる小生炭　角風
情ひかれる表紙ハ皺ふ成　我
頬摺をしく思ひ切する　化
須戸より色こを月立春の月　春
早稲の御供を後まに拾　花
知かれの橋を渡し山蔭　隣
撫て掛てを怪き海珠数　角
芒物ひれも自味ある年丑　風

道具ゆする京付谷　花
祈里ハ誠を養ふ茶の屋　春
物を蘭ぬかりの泥亀　隣

遥ふ思ひやしを不風雅了
ふれて近くを作る一句を窺ふ
岩城山と思へハ事の了夜未立　桃隣
梅ゑ雛の雛ふる方ハ玉河　露沾
引紐寸鉢蘇の枕歩やく　助叟

樂屋の札を懸る清原　沾徳
坂ゆへ門も重てきく秋の月　沾荷
蔵山屋くもの声　和前　鬼谷
彩雲書了に八月の清茶　芳津
去来を訪て沾国
別れを八月に繋を曲さする　谷
何と祇ふもうなる風の音　隣
去帆なる播磨灘の色　沾
祝ちめる松を屋よ海の　豊

彩糸縫ふる袋をうるる色
きぬ分のいろもとまぬ付紙　国
鞘掛八借も清る音の月　津
根ら海ふる山地の橋の木　徳
宗義をもとものいきと　荷
沾生れ松むも鎌倉の俗　谷
除夕所而よ行る雑の夢　沾
文字彫筏を着る清めく　豊
馬嘯の襲も乗地　沾不　徳
　　隣

厠よきく弱るむしの声　国
家門小家も疎く時雨れ　荷
歩り歩行疲て帰る自の秋　谷
思ひ丈そよきのと古草籬　津
祈もハ猫せる　鄙　華　豊
引登す板久の糸行掛書　沾
二人を宮を入る夏笠　隣
交蔭の蚊帳くん出鳥も　徳
蝿了雀の内迄も来る　荷

手拭を彩を流す熱川　豊
旅する夏鷹の味ハ喰ぬを　津
高ンと思くも咤噬なを止ル　国
面く　硯引　残り　床　沾
山の雀ハ弗を拾ひ　徳
地道を分くを書の夏籠　谷

[illegible]八郎須の篠原を送りたんと
約諾して伴筒あと繕るに当日
[illegible]を知らせ[illegible]
たのつゝ浮田おの〳〵[illegible]
かつて勝利を[illegible]

別力[illegible]成[illegible]りたる[illegible]屋山　桃賀
布子　裕[illegible]を帷子　桃隣
[illegible]屋柏も南東を門清[illegible]　翅輪
いやとゝふまゝ[illegible]　助豊

今[illegible]の時[illegible]峰三　桃水
[illegible]を省する[illegible]　白桃
[illegible]の塩八[illegible]　桃雫
[illegible]する仏の[illegible]　賀
[illegible]大形[illegible]　隣
積[illegible]塚[illegible]峰　輪
[illegible]三番三　豊
[illegible]借[illegible]織を[illegible]　桃
[illegible]ない[illegible]　雫

遣いたるまて　水
雪ふと加茂の蓑を取て来　叟
蓑をもとよりは寸法　隣
月代の遅き若葉山百合　賀
野藤たる家を引ッ越　輪
ゝハ〳〵と何もゝ濡る　隣
雨もゝ〳〵降ける　叟
ものわゝも蓑傾ぬ下男　挑
呵くゝを暗蓑の陰　賀

引出よ蓑傾もて雨も大立蓑　隣
撥鍋ふて〳〵ふ朝日　叟
十軒ゝ家ぬを村の名を付　雫
形つゝを四角に組る筆　水
ぞゝとを異の塞るの花　輪
姫まゝ孫と言る子殆るの れ　賀
傍の月西ゝ谷〳〵つゝ　隣
松家とるゝも上ゝ下ゝ有　挑
先交ゝ角力〳〵鶴出ル　水

疱瘡も万理をたの和歌
衣くるまでぬぎすてのとぐるきを　雫
天窓ぬけ九イ癖ふ月さひ　隣
もゝ高ハ猿の出生をもちん　輪
見ゝ柳の根をもつる漏水　叟
雫

雫ぬるゝや蓑ぬぎ屋のあけ方　芭蕉
ふき白ゐる菜畑　子珊
釉ふ朝の子雲の春ゆく　杉風
山雀の根ふ揺ふ紀　桃隣
かん〳〵雀鳴きて雨柱　八来
槽掘りけるも又来る　焦
作ゝて住持こゝ破しる　珊
ゝゝ〳〵作風の吉　風
美堂ふ羽打ぬきてうち枕　隣

かさき新の分たしちかよき　桑
高ひくもやうと月の納りて　焦
山のふかさる　下帝の宝　珊
茅邸の付てハ龍の手むつ　風
四月の月も来て西き新　隣
秋来ても洞のもの知りれて　桑
ひとりの羽の生掛ふ春　焦
つくくと見のまくさも聖　珊
知たいもるもちあるとり　風

正月の来らり鄭治の人雁　隣
清る信をこうれ元　桑
豊の酒雇くく研ほつきて　焦
かいの明ハ帰る女房　珊
伊源を利と斗よる延　風
ちん酒と鞠ハ新と糸ぬす　隣
清雅ふ書を付て切入て　桑
見世ちう裏る裏る引延　焦
ちくく今年ハくく金付月　珊

[illegible] 風
[illegible] 隣
[illegible] 桑
[illegible] 焦
[illegible] 珊
[illegible] 風
[illegible] 桑
[illegible] 隣
[illegible]

元禄六酉仲秋深川
芭蕉庵前ちのたよ入て

生綿を面もとめぬ生垣の山 其角
半の巻〻巻の中の松葉 挑隣
能〻ゝ毎月の〻を見〻て 如我
乳太子を〻〻羽打ふ〻 角
[illegible] 隣
掘り市ある小田の稲穂 我

の七番〻宝法は琴笛の上
持行る高の小屋　隣
今の体親より始て　我
二十四五まで定め心　角
紋好の費いとまあまり　隣
加へとやうに祝ての酒　我
人〻も技持れる医者ハ武士迄　角
梅の香つゝ例る枕行　隣
井の蓋を敲ハ雨の音　我

納屋ハ麻布の清掃　隣
糸〻を引すゝ雨もむの時　隣
法脇金をのけ〻乗　我
級太刀具足の解の表　角
夢ちらつゝ世を物の暮　隣
虫鳴ちらつ年の暮て　我
坊主還ハ　ふ性ちりり　角
夢と揺る二九の初の湘南　隣
妙城の中の　壇よさゝ　我

華嶽しらしらと月ふる峯の月　角

ひやひやとかぜ滝の緒（イトスヂキ）　隣

樫の木よ椎茸山の白よりは　我

木田の一代の赤よこはるる　角

和中まて千年の碧ふる奇仙貫　隣

兎額ハ眉うけて　けむ　我

誰を誰ふる珠巻賢ふる人　角

彼岸七日を　てもち　山　隣

ちるもを　ぬるよ　吹ぬかぬ　我

滝柴代ふる　ぬを　摘　角

四塚の　ぬるを　水の　赤ふる　隣

一ふり　沈　一双の　霍　我

天明民真行

道ふる　桃　隣

とんとんの　野　坡

八月十五日　八幡のうと社頃　利牛
塀の和まて　桐のひろまて　隣
洞蘆ちかまめる波ちまて　坡
つゝ峰ちまて　白のついやも　牛
此の景色ちへ　白ふかる　隣
近くに丹色　谷をまちぬ　坡
ちちち者を常住祈願し　牛
いけちち　十月の月　隣
臺所ちハ雞ふちちち　坡

ふてふちちち　嫁の仕云　牛
ちんまちて　四二ふ海紅ちえ　隣
繼ちちりちち　九月　坡
内ちに色　紅葉色の面　牛
明ちけ　ふ　隣
八の月　八郷樂ちちち　坡
ちちや　行生も十五りけ　牛
ちち平の機　稲ちち色　隣
むひのことと　ちれもこ　坡

賞ぬる果て紅葉(シヨウヨウ)なるまゝ
雪うもれさらぬ蘆をかゝ川
出家の果ハまゝ〻秋の家　牛
杉の木末ハ月かゝくあり　隣
門ゝ〻老の世しのゝ〻　坡
たまゝ〻又鶯鳴ふ待　牛
ちいゝに我身ハ占(サン)をゝ　隣
ちゝゝじんゝとなるぬ高　坡
峰ゝも消ぬ暑さ

糸ハ掛別　牛
懐物ハ組たる富(トン)田影　隣
陰を選ん〻ゝも雁〻ゝ　牛
鬢髪ハ白踏ゝする黄ゝ　坡
光陰ゝ〻ハ入ゝ　隣
門ゝ〻ゝ葉ゝあゝも秋の陰　牛
ちゝゝも風のゝぬも家を　坡

鋤立上京勝別の道弘波園女列子
一句語警世て詠艸愚集の傳小加、
作ら八遠山もそよ重の松　桃隣
のこ

是かも遠山もそよ重の松　桃隣
雪霜後春来ぬ山くら　鋤立
吸物の蓋をとれば温飛よ天　硴水
ふい〳〵ぶよ八伺もおり〳〵来　方雨
遠恒の月一時なるの丸雲羽　宇月
千匂ひなる蔦の葉の風　冬市

岐き庵も榜て又拵こそ　茲少
一文銭ゝ寿小ふ〳〵川く　水
押合〳〵千年松樅ゝ樅を行け　旭志
〳〵やゝ〳〵〳〵を〳〵正月　隣
何の千凾（ワカン）て負ける素雲（シラス）雲　市
毒の位イもよん〳〵〳〵　雨
〳〵〳〵唯名千ふたい物の角力　茹毛
女〳〵織（スリ）を〳〵袖の露　立
文やこゝ位吉堺岸の和田　隣

月見の席にて食ハ喰物ハ　少
二十五の尼共人もそこそこ　月
袴垂にて糸の糸ハ　志
まの垢ハ俗ハ　毛
角のそこそこ細の用ハあ　水
蔵ハ物陸奥ハ綫白の後　市
内を釈けハ食もハ　立
中言方新そこそこ化粧夫　隣
國何の見諸おそひ伊勢さ　月

義ハ出百日もあも二百日　毛
碁盤を押て第の鞠　雨
ハトあそこ人呼掛る義の家　少
物何のそこそこ子の車を注　志
そこそこもつそこそこ源氏お美　立
月そこそこ見ハ出ハ　少
七つそこそこ大そこそこ面雑の吉　月
小児の孫をそこそこふそこそこ　市
籠掛ハ俗人そこそこ世ハ見袋の級　志

同一家ニハ系ついゝ流　水
常ニ所も碧桃の附　雨
梅ハ色ひよ人を惑ス　毛

古太白堂桃隣句選

春之部

うゝ雪の春に起ル雀哉
七種ぬる老松ハ色の青
泉川の畠をたゝく春の雨
ひゝ鶏ハ濃のなるゝ梅ぬ
筆ぬ残ル花の色の據

雪雖墓了詣ける

高く積りて松も眠るや書の面

石根や雪を蔵る谷の水

雪ふに蔵るや仏の石の形

世の中や大根の葉も蔵色に

藤柳や塩をとる琴弾ぶ不

ちるもの不八流れ行きる老川

東叡山

曉は花を見る花見の和

ちらく咲や張者は古行

奉納

蛮の番や七ッ曲る山橋

雪の蔭を蛙ふ行る樣ふ

見もなき筏乗り行方知

首途

何ぶまを蔵る時も昼瓶

畑中の雲雀巡せ拝殿却

永蔵や馬ふ附り雑仕弟

鹿沼より

春日　奉納

額ヶ嶽の麓より三里のもなく
本国なる沼代より安中要石
神軍社敵城の
鬼社血とつゝふ獅獨の
能波壺山の奇瑞多し
土浦のもやまくしる能波山
能波根中とくゝ物と為社

海棠也編多咲る寺ゝ
赤松の末末中無垂もの殿
小栗村あゝる
沼鉢社鋼多もゝしさゝ川
東照宮幸納
宗多社輝く山中東向
冨嶽山
二日目ゝる雪ふる
もゝ八時多湖水ゝ第八位寺ゝ

雲八面をとゝのへ
立東ゝし黒髪山の麓ハ河

寂光ゝ滝あるを
手向の酒ゝ苔のもゝまし
雲ゝも雲ぬ滝乃ゝゝ哀
行ゝゝハ永眼ゝり番かゝ
暑ゝかひもなき古墓也四郎坂
又ゝゝ旅ハ旅ハ
暮ハ月に到るまね者ハ未の浦

石川や藁ぶ河の蛍哉
帆の影ゝゝゝ今日も真の海

夏ゝ記

上

七月朔日雨
物鳴ゝ谷羽や手の文

更衣ぬもつけし楼蘭に
前まとる二階に揚りければ
遥けれバ中々しき風雅に
取わけて手々に佳章一句を
需らる

岩城山と思へば雪の夜ぞ見え
一八ハ武家にもさも見へ牡丹かな
石麿も庭に列ましし舞の袖
けふしきま雨の匂ひや富士紗

こゝしらなき　揮まかゝて
草まれ枕につゝみし末の刺
乃とゝり便りをうらむらく

黒羽の尋る方や雲すゝめ
浄坊寺桃雪主にて
翌日真つけ
箴とせる椴はやうけ蝸牛
呼声や翁を写しし風を塞（フサギ）
法楽

木の下やくさまくらの山樗

四月

山蜂の行衛や牡丹なる白牡丹

奥の雲や四月に晴る雲の山

[illegible]

柱くり四ふのくなるる夏の風

掘ぬきの柱ひやひや縄簾

小名濱

和鎧さらす不ハ小名濱

次ヶ川さらに一里程ふ石川の流れ

ちらも夏流く花迎む山の野

結縄の橋柱四丈玉川玉結石

何とも月し何ふ東雲

橋に来ふく踏ミ鳴まふく 蝸牛

蔵主ふく名も玉川の玉柳

浅香山

南部ふ第山の傳あ

五月女子七夕 投ん浅香山

仙臺板山氏真行

山川の富を祝す

寿代躍て清きやを影八音高ふ山
とと。ゆ〳〵ちよを寿やを花の一位
ゆのを免蓍代りを陰奥の情ゆ

仙臺大町南村手綱こに宿す

蔵つ〳〵を明日の玉月ふりふの西

殺生石

殺生石を拾ふ立ちむし

取あ寄て川こ屋ゆ鶯樹
麻の子ちゆとおひ岳や山富
ゆ牡丹ふ立ちゆ月の明家
牡丹見ふ立ちゆよる夜寒
醤醢のまきれ〳〵佐を牡丹
行と湯の寒を拾ふ咽夜部
ふとと寒不二見ふの下家部

机よ付を曲

多自を人の寒ぬ日ハ九稟

家如塚山の井まて
山の井を汲とそうふ毎敷ち
あ遊ッ原
塚とうり今も残るッ妻面
文字摺の石 長サ壱丈巾七尺余
文字摺の石は幅狭ッ扁ッ形
実ニ中古の塚ふ同しく
石柱多四方の塚なり
云のまゝ蔵りをとけて塚二ツ

一ッ世芭蕉法ッ川ふ来りて
歌の号ともを書ひ四柱塊の
塚流とのこと 平泉ッ
実塚ッ例の柳ふ長
ッ

鳴ッ清ッ細川藤右
ッ井ッ春ッ雷ッ蛙蹠
蓋ッ河ッ夏ッ刈ッ麦畑
蘆の花の上
橋ッ下ッ蘆ッ者の蘆

たゝぬる酒も破るゝ夏の月
塩幡の浦に出るゝ橋の上

箱根の関あり

いくせの路や行かふ雲の末
川こしの富士の浦や田のつゝき
五日まで夏の座しるいやあり

伊達郡桑折四村氏ハ武江
不ト門ふるゝて来ル此の
所をさのく清の巻ゝ清ル
ゝ遠い所下官 波ゝ蘇

をたゝき 捨をゆゝ
誰ゝ柿ゝ葉ゝ中能 行留
雀ゝとゝて宿の月 嶋の清ゝ
陳ゝ雲ゝ 移近ゝ魚や 湖朗
か月雨の色や 清ゝ川大和川
淀川の末や 女中の蔦ゝ 物

羽黒ハ景の中

移近ゝも書ゝ天ゝ 西川
夏の月 猶ゝ物 仮滝山

笠打や見ぬ面の通り不
蕉雨や八幡の里よ夏月

行者堂より塔

ほよほよまゐ蓼貢や九折

南殿梅花の里名ものの井と
伝家庄司墓不一石塔次信
忠伝ゑ塔あり

里の井の名も軒ばや牡丹
九ゑの橋も咲きいるまゆの糸

義経腰掛松より

幸嶋と号根ハいるゝ松の蟬
軍めく二人の嫁や也菖蒲

武隈の松ゑ

武くゝ国の松雄反の下源
陵貢や未を離ハ行ゆ迄
一島ハ釈よ塔ゑる清ゑ水

岩切新田と云村ゑ
外沢よかゑ見や一ト撞

塩竈の明神へ法乗
祢宜明よりて日の入る音絶
自海へ舟賀の出汐八分ふの
杉時やも自分も暮へも敷の雪
たちそ杉や緑ら時ハもいりに
橋二ツ潮汐源へ立大事
妻恋へ時へ見川へ富の色
歳ら麦やいるも海き石の色
御ら浜や夏とこ石へ今もの山

笑精の花やきんこの奇石
ら間や海へき海を遠眺
今を堂や泥ともれす道の色
田へ又寄ら むうへ語や云い
軍ち人力も又又を飛ら
虹ふへてぬけら海へ彩の色
扑の末のものや章の下ら

古川ふ宿よ事へ秋山紫麓
平泉ら長人ら一宿

暑き日や神農幕ふるの中

夜烏といふ村うすき小町塚ありこれ西の方やタ日の塚の上

移家の山極むしの盛提山

山路吟

おそろしき谷より深き蔦の紅

鳥啼て行も交る雲の間

渡仮よ高山桜をちこち

雑茅をこえ二十里ゆるぎ川

志ろ糸の滝やこうろよりみた

星ふるふうらの風う油う浦

うらうしろ山るるや汐田の辻ゥむ

きさらぎや雨をしろしろ交接

能因よ酒もしろ一つの雲の色

芭蕉よ清水やうるおうるる良も

世地よ雨ゆ

彼こそ数繁りやうけー移る巣

うやむやの家やむやく鬼人中

樹もなく有の行くに夏冷き
夏なれば八洲系に袖ぬれ川
白十間橋を渡るのあふり水
吹く嵐に木葉の蟬も鳴止ぬ
おりしも山や色ぬれ湯田の夕涼
手に自ら陽炎みなぎる南谷
大汗の行程幾重一日の山
山毒や湯屋を相む人の姿
芭蕉翁山の作

補陀洛の山に世を奥の院
秋迄打寄ゆかしき山
六上市

野も森もかすみ初の色
山寺や雲の有る雲の峰
天神社造立半
石窟に雨を此松梢

秋之部

文月の神無　諫人　碑石

高雄の紅葉や京より始のもの

こがらしや藤の実の

秋果しいつぶ哉　柳法

一反の畑や柳のちるもの

望月や粉屋の門の葛葉哉

送るるの沈黙あるは二世の本

松風や二人ともに絃の結ひと

ふるもの

尺とるは稲ばかりやまず通

安達川庚申と海合

出羽の人藤ふる秋と庚申

笠脱ぬ天宮拾ひ一系哉

又ひろふ七日の夕の

ものの稲葉ひろふ山の

垂雨ふる嵐の葉ごのむ

いくたび二百 俤の姿と

ながめしみちもわかず

花ちるのこゝろ浦しき

千枝とくらす ゆふ

ゆけども 芽(ホサツ)ぐる 秋乾

移事や二葉むの 相ぬき

麻ゆへ八重もしき 杜の魂

相ゆかぬ海ゆきぬき 果の霊

まつこゝのわそ好須の七 撫

新 掘 會

庁 底 陣の 孫 とみて 月の秋

稲の事や 我 ふるふ 恵日

乞 月や 嬬 白き 霧の色

山畑 ゆ 粒の ゆ 果 ゆ の 月

小 松 川

青 ゆ 葉 ゆ ゆ 川 葉 流 ゆ ふ の 月

名 月 や 雨 垂 ゆ る 乙 の と

久月や千さんための庵の松
青々と中空迄る四方の見
渡すや山畑に打更しの春
うち捨てしまゝ冬ゝ荒
源人と藤さま新屋作り
有明や山の端も春の海
きりゝす鳴やこゝのつゝ
来入る春寒の雨 稚ふゝ
情ゆのまゝ名ゝ訪打

北行寺

十人の厨来て酒盛
縁寄の毛氏の
蔵社会味源き焼や蕎の弁
当とおむ〳〵如意
乃ゝ〳〵ゝ拾い集〳〵かゝ
瀧会へ行ぬゝ信の月
業稗い前ゝ五二て古き
打ゝ寺ゝ秋ゝ物のゝ

落葉に思ひみだるゝ角田川
淋しさや常盤と櫨子は田にて
宗祇の馬や角振席を　蝸牛

鎌倉

ひく枯や七里ヶ濱も八里ほと
　　おかしく女
銀杏も落るや神の旅支度
ゆく慎や泥にまみる秋と思
ひく枯や樅より落る　蝉の売

　行徳舟にて
おり返しては又は沖に出る
管笠よいふもおかし数もなき

　下総八幡
神主は此人知れは八幡佛
椎の実ちる門や目暮る女子
吉田の結しは名のみにして
いまゝの流を汲り仏法ちは
をの印る　境内のゝ　名よ

この海ゝ[illegible]も秋の末哉

[illegible]の[illegible]あきと柏間の人もこゝに

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

古寺や紅葉ふる[illegible]ゝ哉むし

國府臺

松ばゝ秋風[illegible]ゝ古戦場

市川

湖[illegible]や川ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ人

山岸[illegible]と[illegible]や憐[illegible]

[illegible]

冬ゝゝ部

市中や木の[illegible]ふる[illegible]不二庵

木枯の枯ゝ[illegible]ゝ[illegible]

屋根[illegible]の[illegible]ぬ[illegible]村[illegible]

元禄九丙子十月十二日 翁三回

ゆゝ更ゝ袖と[illegible]ゝ[illegible]梅

[illegible]

口切や聲[illegible]

[illegible]

英徳の[illegible]

[illegible]

鎌倉極楽寺

口切よ[illegible]服茶[illegible]

由比ヶ濱

人[illegible]

松ヶ岡

蔦の葉の[illegible]

橋原[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

隅田川

大久の[illegible]

[illegible]

大津尚白亭

[illegible]

[illegible]

一[illegible]軍裏[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

川崎宿

[illegible]

六月

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

麦は白や唯白妙の麦畑
市中や泥亀鶏をへ重の影
たゝかれし鳴ても〻ゝし重の門
談林
夫川やや筆捨山の太ひ〻り
糸くさや松原に鷺さし舞ふ柱
はか焼や浪数と鳴夜明しゝ
雷鳴とありて一群なる〻の物
裸にあらしふつゝも枯野かな

紫蕎や枯野かゝ口の小扇ひ
山寺の庭に見ゝ盛や冬籠
山葉色や来ゝ清なき枝の霜
調和
立志の身る時隣る家の
夏蔭の寺の物も哀しく
名物あるゝ〻
埴くゝき居るもおかしや赤鍋
條掃やところ〻凪の色下り
蕩志して霜もいまし悠未樵

[illegible]

[illegible]

年内立春

年の内は春や梅の枝の梅

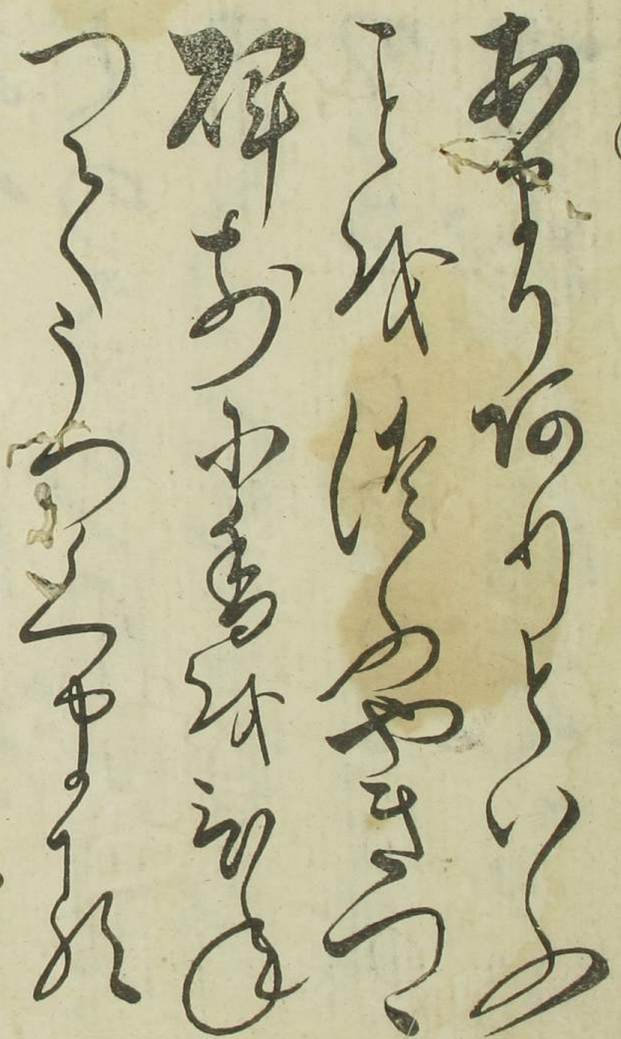
桃隣句選終

[illegible]

ほとりて、雪のめん
ぞさんせうしよう
こりち浮世にいりて
ると世は小夢ら家の
ぬるとろうりめ
かれハ汁にまちふ椿字

諸とりし雪のごとく
あつかり法延と記
くのさち風情はて
ふるゆめのこともらて
かきぬるまちさき
万徳の雕尭ろ代

終



文化元年甲子九月

東都書林

江戸大傳馬町二丁目
大和田安兵衛

同柳町平川町二丁目蛤店
乗星閣甚助

文化十酉年
五月中旬

青奉庵
訂芝
亮親

北条龍湯村上氏